

SSIndex開発秘話

2022年1月の
記事はこちら



株式会社サステナブルスケールと九州大学の共同研究で作られたESG/SDGs評価モデル“Sustainable Scale Index”（SSIndex）をFFG3行のお客様に提供するための今回のシステム構築は、FFGビジネス開発部のアジャイル開発チームとの協業で行なわれました。ビジネス開発部として初めてFFG3行の全営業店が利用するシステムを作ることになったという開発チームの皆さんに話を聞きました。

—まずはアジャイル開発チームについて教えてください

どうしても世間的にはみんなの銀行が話題になりがちですが、実はみんなの銀行より少し前に動き始めた内製開発のためのチームです。ゼロからデジタルバンクを立ち上げたみんなの銀行とは対照的で、元々あるFFG3行を基盤にしたサービスの開発や既存事業のデジタル化、あとは銀行の枠を超えた新規事業創出活動などを行っています。

最近だと『こうふりネット』という口座振替手続きのサービスが正式にリリースされましたが、あれは地場の収納企業様と実証実験を行いながらビジネス開発部で企画・開発して生まれました。口座振替のお申込みをWEB上で完結できるだけでなく、安価な費用で導入できて、お手続きいただいた情報をデジタルで取り扱うことができるため大きな反響をいただいています。

メンバーの構成は、技術系の専門職なので中途採用ばかりかと想像するかもしれませんが、協力会社の人を除くともう3割くらいがキャリアチャレンジ制度を利用した銀行員になりました。長いメンバーだと転換してから3年超えますし、バリバリ活躍しています。今回SSIndexを開発したチームはその中でも異色で、1年前まで福岡銀行の宗像支店で働いていた3年目行員と韓国インテランシップ採用の2名、それに中途で入ったシニアエンジニアの4名で構成されています。

— 今回のSSI Indexのシステム開発をするようになった経緯を教えてください

はじめは自分が担当していたサービスとの連携というところから参加しましたが、その頃はサステナブルスケール社はお客先企業のSDGsを後押しするというビジョンのもとに打ち手を探っている状態でした。その時検討していた外部のベンダーさんとの進め方の場合は、納品まで数ヶ月は掛かってしまった

めどうしても仮説と検証にかかる時間が長くなってしまう。いわゆるウォーターフォール型と呼ばれる方式を否定するわけではなく、今回の件はアジャイル開発のアプローチの方が向いているように思えました。そこで、小さく始めてお客様に受け入れられるものを探りながらやりませんかと提案して、ビジネス開発部の実証実験プロセスにのせて協業することになりました。実はOJT中の3人にちょうど良い開発案件を探していたタイミン

グだったので、こちらとしても好都合でした。2021年の5月の下旬に動き始めたときにはまだSSI Indexという名前すら生まれていませんでしたが、7月にリリースできたパイロット版のESG/SDGs評価でお客様の反応を確認できたことからサービス化に繋がりました。また、内製開発チームが存在することを銀行内外の人に知ってもらえる良い機会にもなったと思います。

—最終的にFFGの複数の部署も巻き込んだプロジェクトになりました。こういう他部署との協業で苦労したことはありますか？

やっぱりスケジュールですね！一般的にシステム開発では「時間」「コスト」「スコープ」の3つのバランスを意識するのですが、今回はプレスリリースや通達などで期日は決まっています、コストは主に人件費ですが、開発メンバーの増員も難しく、この2つは動かすことが出来ませんでした。出すと決めた日付はどう

しても守らないと影響が甚大なので今回は「スコープ」での調整をすることにして、機能を絞り込んで、サービス開始日に何とか間に合わせました。

—結果的に半年ほどでサービスを提供開始することができました。この点についてはどうですか？

前職でインターネットサービスをやっていた身からすると6ヶ月というスピード感は早いとは言えないですね。ですが、当時もサステナブルスケールの人が「キラーコンテンツ」という言葉を使われていましたけれども、まずは一番自信のある診断に絞ってパイロット版として7月に公開できて、それに対してお客様の反応を見てから進めることが出来たというのは良かったです。

ただ、今回は運よく1つ目の施策が当たったのでこの期間でサービス開始となりましたが、この結果だけで「アジャイルでの内製開発は安くて早い」と思われるのは我々としては

避けたくて、本来は小さな仮説検証をすばやく繰り返しながらお客様のことを知って正解にたどり着くという手法なんです。

ウォーターフォール型に慣れた人には考え方を切り替えてもらう必要がありますが、内製開発組織を持つ最大のメリットはここにあると思いますし、お客様に寄り添ったサービスを模索していかないといけない銀行にとって武器になると思っています。

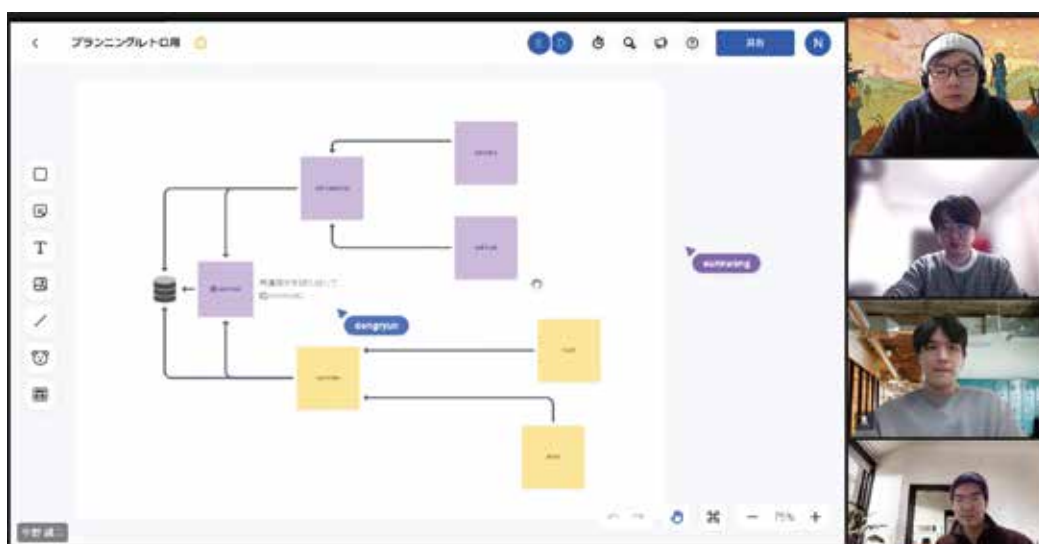
今後もよりよいサービスが作れるよう、こういったコミュニケーションもとりながら進めていきたいです。

— 今後も協業して開発していくことですが、開発の目線ではどのようなことをやっていきたいですか？

無事リリースできましたが、これがゴールではなくスタートだと考えています。

まずは足元の、今回作った評価の仕組みを他社様から使えるようにすることで、評価モデルの精度を向上させていきたいです。

あとは、今回このSSIndexができたことのお客様と銀行員がSDGs観点で話をさせていただききっかけが増えたと思いますので、そこから例えば、様々な環境問題へのソリューションをお持ちの企業様との協業のようなお話に発展することもあるかもしれません。そういうときに開発のメンバーが居れば連携の話をスムーズに進めることが出来ます。部署間の契約は請負となっていますが、請け負った開発をするのではなく内製開発部隊がいることの強みを出せるように、サービスに対して主体的に関わりながらやっていきたいと思っています。



テレワークによる開発ディスカッションの様子